食糧供給と近代的農業実践の場

4 竹内農場の歴史

竹内明太郎が蛇沼に隣接する原野に農場を開設した目的は、茨城無煙炭鉱への食糧供給と、近代的な農業を実践するためだったと言われています。日本各地に炭鉱を経営していた明太郎はここ龍ケ崎の地でどんな夢を描いていたのでしょう。農場の歴史をたどりながら考えてみましょう。

農場の開設

稲敷郡馴柴村大字若柴字長山前（現茨城県龍ケ崎市若柴町字長山前）の地は西に蛇沼を有し、明治末期までは松と椚の混合林からなる女化原といわれる未開の地でした。

大正元（1912）年馴柴村に払い下げられた未開拓の官有林を竹内綱と土田謙吉が共同で購入しました。竹内と土田兼吉の関係性は不明ですが、土田は上郷村（現つくば市）出身の開拓事業家で、県内だけでなく北海道の開拓にも事業をすすめ、茨城県知事や大日本農業総裁から表彰されたことがあります。そうした土田と、茨城県内に開拓農地を求めようとした竹内が意気投合し、どちらかが共同購入の話を持ち掛けたと考えます。

共同購入のうち竹内分は風光明媚な蛇沼（**写真 1**）に隣接し、良三（明太郎次男）、廣（綱七男）、直馬（綱四男）の 3 人に分割されます。そしてこの土地に綱の事業を引き継いだ明太郎が、竹内鉱業の付属施設である竹内農場を開設します。

農場の主要部分は廣名義の土地に集中し、良三名義の土地には後に明太郎の別荘として赤レンガの西洋館が建設されます。

竹内鉱業は他にも農場を持っていましたが、関係者は当地の農場を「牛久農場」と呼んでいました。馴柴村（現龍ケ崎市）所在の農場を「牛久農場」と呼んでいた理由は、最寄り駅のひとつが常磐線牛久駅であることや、牛久シャトーのブドウ農園に連なる開拓農地の一角に農場があったことが考えられます。

牛久駅のほか同じく常磐線の佐貫駅を利用していたことが『竹内明太郎日記』（高知県宿毛市立宿毛歴史館所蔵）で分かります。明太郎は佐貫駅で下車し、田んぼや山林に囲まれた約 3 キロの野路を妻の亀井を伴い時には歩いて農場に向かいました。一方牛久駅から農場までは約 4 キロあり、佐貫駅より少し遠くなりますが、こちらはすでに道が整備されていて、主に馬車か牛車による農作物の輸送に使われていたと考えます。

竹内農場経営の目的は

竹内農場の目的は、竹内鉱業傘下の茨城無煙炭鉱への食糧供給であるとともに、西洋を模倣した近代的な農場経営の試みでした。実際の農場運営は国光亀治支配人に任せていました。国光は竹内鉱業付属農園主任で、九州唐津、北海道夕張と全国に跨る竹内鉱業運営の農場を転々とし、大正 2（1913）年から「牛久農場」の支配人を務めています。

国光は 4 頭引きの洋式犁を用いた大農場経営を試みたようです。10 人ほどの農夫を雇用し、そのほかに日雇い農夫もいました。農夫の大部分は貧窮する女化開拓農民だったようです。生産された大麦、小麦、甘藷、馬鈴薯などが茨城無煙炭鉱に送られました。当時の茨城無煙炭鉱は常磐炭田南部の中で最大の規模を誇り、鉱員と家族合わせて 4,000 人を超える大所帯だったといいます。（15 ページの「茨城無煙炭鉱」を参照。）

農場は東側に一反歩区画の畑地が 10 枚並び、他に桑園や桐畑がありました。一反歩区画の畑地はいわば農事試験圃で、国光により次々と新しい試みが行われました。梨、桃、栗、落花生、白菜、西瓜などが作られ、そのうち黄色い西瓜は大変珍しく、近隣の話題になり直売も行われたといいます。

図面によれば、南側は放牧場で、牛乳取扱所、牛舎、厩舎、堆肥舎、第一・第二農夫舎、便所、浴場、事務室、農具舎、収容舎、住宅などが並んでいました。

茨城で新たな出発を

長岡安平による『竹内家農園内庭園設計図』（大正３（1914）年、龍ケ崎市教育委員会所蔵）には別荘の位置が示されています（**29 ページ図 1**）。ここに明太郎の農場運営とは別の目的が垣間見えます。大正３年には既に佐賀県の芳谷炭坑は売却され、石川県の遊泉寺銅山は鉱脈が先細りの状態でした。一方、茨城無煙炭鉱の採掘量はピークを迎えています。こうした状況の中で、明太郎は竹内鉱業の将来を茨城無煙炭鉱に託したと思われます。東京の竹内鉱業本社と茨城無煙炭鉱の中間に位置した農場を芳谷炭坑時代の唐津に代わる新たな拠点と考えたのでしょう。贅を尽くした別荘の建設や、長岡安平という当時を代表する造園家に農園内庭園の設計を依頼したのはそのためで、また炭鉱の先行きの不透明さを考えると、芳谷炭坑に唐津鐵工所、遊泉寺銅山に小松鉄工所を創業したように、茨城県内に新たな事業を考えていたと思われます。大正８（1919）年５月７日発行いはらき（茨城新聞）によると明太郎が南中郷鉄工所の地鎮祭を挙行したという記事があります。しかし、この鉄工所が完工したかは定かではありません。（16 ページ「茨城無煙炭鉱」をご覧ください。）

農場は大正８（1919）年頃が最盛期で、鉄道（牛久駅迄の曳索軌道か軽便鉄道）を引く計画があり、実際線路材も運び込まれていました。大正９（1920）年には明太郎の別荘である赤レンガ西洋館が竣工し、唐津の別宅から家財が送られてきます。長岡安平設計の造園が行われたのもこの頃と思われますが、実際のところ設計通りに造園されたか定かではありません。ちょうどこの年、遊泉寺銅山が閉山となり、核となる鉱山は茨城無煙炭鉱だけになります。ところが頼みの綱だった茨城無煙炭鉱はその後の炭鉱不況で弱体化しこの地における明太郎の夢も萎んでゆきます。そして大正 14（1925）年に茨城無煙炭鉱が売却され、炭鉱への食糧供給という農場運営の根幹が崩れます。

昭和３（1928）年、明太郎は 68 歳の生涯を終えます。その影響で農場の運営母体である竹内鉱業が廃業となり、農場は小作人に任せ関係者は昭和５～６年頃に東京等へ引き上げていきました。

以降、不在地主と小作人という関係が生まれ、小作料の徴収などの管理は馴柴村役場の紹介により八原村の塚本幸三郎が行いました。戦後、GHQ の政策により、農地の総ては小作人に譲渡され竹内農場は完全に消滅しましたが、直馬名義の西洋館と良三名義の西洋館敷地は竹内家のものとして残りました。

写真１（上）風光明媚な蛇沼周辺は現在龍ケ崎市により公園が整備されている。　２（下）西洋館上空より許可を得てドローンで撮影。西洋館敷地のすぐ手前まで太陽光発電のパネルが迫っていることがわかる。